

イザヤ書6章1-8節

ヨハネの黙示録4章1-11節

ヨハネによる福音書16章12-15節

本日は三位一体主日です。先週は、聖霊降臨の喜びとわたしたちの教会の創立133年記念を祝いました。本日は、わたしたちの信じている神様が、「三位一体」の神様であることを、改めて確認します。

わたしたちの教会は、この「三位一体」を名前に持つ、世界中にある教会の一つですが、近年は、この「三位一体」という事柄は、あまり強調されなくなっているようです。いろいろな理由があると思いますが、ここでも「聖霊」という存在のわかりにくさが、関係しているのでしょうか。

様々な学びや研究において、主なる神様とイエス様をテーマとする機会はたくさんあります。しかし、「聖霊」そのものをテーマとすることは、あまり多くないと思います。そのような「聖霊」ですが、それへの学びは、当然、わたしたちの信仰と歩みを、より豊かにすることにします（バルト的に言えば、不可視的教会が可視的教会として存在できるのは、聖霊の働きによるのです）。

本日の旧約日課「イザヤ書」は、イザヤが預言者となるように主なる神様から呼びかけられる個所です。いわゆる預言者の召命の箇所です。ここに「霊」という言葉はありません。本日の日課となっているのは、「**聖なる、聖なる、聖なる万軍の主**」（イザヤ6:3）という言葉があるからだと思います。

本日の個所は、「**ウ ज्या王が死んだ年のことである**」という文言から始まります。ウ ज्या王は、南ユダ王国の王様です。その死は、紀元前742年のことです。北イスラエル王国が、アッシリアに滅ぼされる20年前です。南ユダ王国の方は、ウ ज्या王がよい王様でしたので、王国としては、安定して豊かな時を過ごしていました。預言者イザヤは、そのウ ज्या王の在職中から、活動していたと考えられます。本日の箇所でイザヤは、「**わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた**」（イザヤ6:1）と、そのウ ज्या王の死後起こる事柄を見た、と語り始めているのです。

2節以降、セラフィムが登場するなど不思議な描写が続きます。しかし、セラフィムが唱える、「**聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う**」（イザヤ6:）は、わたしたちが礼拝で用いる言葉、「聖なるかな」のもととなっている箇所の一つですから、すこし身近に感じます。そして、そのセラフィムのひとりが、イザヤの口に火を触れさせて「**見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された**」（イザヤ6:7）と宣言します。こうしてイザヤは、預言者となることを許されるのです。

本日の箇所には、「聖霊」という言葉も、「霊」という言葉もありません。しかし、少し前のイザヤ書の4章4節には、「主は必ず、裁きの霊と焼き尽くす霊をもってシオンの娘たちの汚れを洗い、エルサレムの血をその中からすすぎ清めてくださる」とあり、ユダの贖いが、「霊」によってなされることを告げていました。また、本日の箇所の少し後になる、そしてクリスマスの時に読まれる、イザヤ書の11章1から2節では、「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」とあり、平和の王となる方も、「霊」によって、それを成し遂げることを、告げています。

イザヤの召命の箇所は、「霊」という言葉はありませんが、預言者の召命も、その活動も、神様の霊によるものであることが、大前提なのです。不思議な描写は、その「霊」の働きの表現と言えます。そして、イザヤも「霊」が彼を促したからこそ、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ6:8）と告白できたのです。預言者の活動は、人間の働きを超え、主なる神様の「霊」がそれを可能にするからです。

『聖書（旧約）』には、三位一体はもちろんのこと、「聖霊」という概念はありません。しかし『聖書（旧約）』、主なる神様の「霊」が、神と人とを、また人と人とを、結び付ける存在であることを、語っています。預言者の活動は、その一つです。それは、三位一体という理解の大前提といえるでしょう。

さて、本日の使徒書は、「ヨハネの黙示録」です。正確には、使徒の文書といえるかどうかというところですが、『聖書』の中でも一般的にも有名な文書です。しかし、非常に解釈が困難な文書です。解釈が難解である理由の一つは、「黙示」という手法を用いて書かれているからですが、「黙示」とは何かについては、ここでは触れません。ただし、本日の「聖霊」という事柄と関連させるならば、「黙示」という手法で描かれたこととは、「聖霊」の導きによって書かれたと表現できると思います（『聖書』全体がそうだともいう前提に立ったとしても、特にとという意味で）。それゆえ、普通に読んでも理解できないのは当然です。「聖霊」の導きがなければ、よく理解できないのです。これらのことから、教会は「聖霊」の導きを通して、この文書から様々事柄を引き出してきました。その一つの例に、本日の4章6～7節の部分の有名な解釈があります。

「この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった」という文言ですが、教会は、この四つの不思議な生き物に、マルコ（獅子）、ルカ（若い雄牛）、マタイ（人）、ヨハネ（鷲）と、四つの福音書の著者のそれぞれのイメージを見たのでした。それらの生き物が、それぞれの福音書の内容を、端的に指示していると感じたのです。そのことを通して、たくさんの福音書がある中で、この四つを正典としたこと、それが正しいことであったと感じたのです。そのような意味づけは、

「ヨハネの黙示録」の著者の、元来の意図とは異なります。しかし教会は、「聖霊」を通じて、四つの福音書の大切が、そこに示されていると考えたのです。

4章8節の言葉、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」と聞くとき、わたしたちにも同じような聖霊の働きがあります。時と場所を超えた、『聖書』の世界との、あるいは様々な記憶や思いとの、不思議な一致を感じるからです。「イザヤ書」と同じく「ヨハネの黙示録」のこの箇所が、式文のもととなっているわけですから、当然のことといえますが、その感覚は、単なる文字や音声の一致を超えて、礼拝を通じた体験、すなわち「聖霊」による霊的な体験がそのように促しているのだと思います。

預言者イザヤの召命も働きは、「聖霊」によるものでした。「ヨハネの黙示録」の著者も、「聖霊」によって何かを見て文字化し、教会もそれを「聖霊」を通して解釈しました。本日の福音書、「ヨハネによる福音書」のイエス様もそのことを語っています。

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」（ヨハネ16:12）。このイエス様の言葉は、「ヨハネによる福音書」という物語世界の中では、自分が立ち去るにあたって弟子たちに向けた言葉です。しかし、今、「ヨハネによる福音書」を読んでいる人々にとっては、自分たちに向けられている言葉です。その人々には、時空を超えて、今、2022年東京聖三一教会の礼拝で学んでいる、わたしたちも含まれます。ここにある「霊」とは、もちろん、「聖霊」のことです。その「聖霊」を「ヨハネによる福音書」だけは、「弁護者」と表現しているのですが、それはそばに（傍らに）呼ばれた人という意味です。そばに（傍らに）呼ばれた人、いてくれる人ですから、状況によって、「弁護する人、慰める人、励ます人」と様々な意味になります。今までも、今も、そしてこれからも、この「聖霊」が、わたしたちのそばにいて下さると、イエス様は語っているのです。このイエス様の言葉は、これから迫害の時代を迎える「ヨハネによる福音書」を読む教会の読者たちを、強く慰め、そして励ましたと思います。わたしたちも同じです。それぞれの人生において、「聖霊」を通して、主なる神様から恵みを与えられ、導かれ、守られるのです。

「イエス」様を通して「主なる神様」を信じるわたしたちは、「聖霊」によって、いつでも、どこにいても、どのようなときも、地上のそして天上の多くの信仰の友と、そして主なる神様とつながります。その事実の中に、真の恵み、慰め、導きなど、主なる神様が与えてくださる良いことのすべてがあります。それは不思議な事柄です。不思議すぎて、人間の理解を超えています。その人間の理解を超えた、愛と恵みに満ちた事柄を、人間の言葉で表現しようとしたときの「しるし」が、三位一体です。わたしたちは、これからもその「しるし」を名前に持つ教会として、そのすべての恵みに感謝しながら歩みたいと思います。世界に主なる神様の、愛と恵が満ちるまで、歩み続けたいと思います。